

# 老人—精神—言葉

(西東詩集への一考察)

長谷川 茂 夫

西東詩集の冒頭を飾る詩「ヘジラ」で、ゲーテは東方への「逃避」を歌っている。

逃れいでよ 純粹なる東方へ1)

しかし、詩集全体を展望するとき、ここで言われている東方は、連作の背景を形成し独自の完結性を備えた詩的空間では在りえないことが、明白となってくる。シュタイガーがその論文で詳説した長編詩「夏の夜 (Sommernacht)」に顕著である如く、個々のモチーフは東方的なものと北方的なものが大胆に混在して地域の単一性がまず破壊され、また異国趣味としての東方性及びバルシヤの詩人ハーフィスの単なる模倣は専ら初期の作品に限られて、詩集の成長と詩人の発展に伴い、東方のもつ意味が変貌を遂げ、より抽象化されてくる。ゲーテが詩の表面上の意味とその背後に隠された象徴性というハーフィスの手法に心ひかれていたことは、「注釈と論文 (Noten und Abhandlungen)」中の「未来のディーヴァン (Künftiger Divan)」と題された一章に表明されているが、象徴性の問題は、実際には西東詩集中に見出せる詩としての言葉の多様な

問題性の一部でしかありえなくなっている。

「ハーフィス書 (Buch Hafis)」中の「目くばせ (Wink)」でゲーテは、「言葉は扇である」<sup>2)</sup> と定義している。そして、「扇は愛らしいヴェール (ein lieblicher Flor)」<sup>3)</sup> なのである。それは少女の顔を隠しはするが、少女を隠しはしない、何故なら少女の最も美しいもの、その瞳が扇のすき間から私の目へと光輝いているからだ、と。少女の瞳が詩によって象徴される何かを指すことに異論は無いであろう。この比喻は、現代の詩人、例えば Paul Celan の Sprachgitter の考えと一見共通するように見えるが、ゲーテがツェーランと根本的に異なっている点は、ツェーランの場合言葉の隠すという働きの否定的側面がより強く意識されているのに対し、ゲーテは Flor に「愛らしい (lieblich)」という形容詞をつけていることである。言い換えれば、一編の詩に於いて最も美しいもの (das Schönste) は勿論全体が象徴し暗示している内容であるが、一応内容を離れた言葉そのもの、即ち、言葉のための言葉も充分愛らしいものだ、という考えが、ここから読みとれる。この考えがゲーテの一生を通じての信念であったかどうかは、敢えてここでは触れない。あらゆる事項に関して、ゲーテほど自らのうちに反証を含んだ詩人は他にあまりと思われるからである。しかし、少なくとも西東詩集においては(更に少なくともその一部においては)、明らかにゲーテが言葉のための言葉を楽しんでいる様が伺われる。二・三の例を挙げよう。

「ハーフィス書」中「判決 (Fetwa)」と題された二編のうち最初の詩は、ハーフィスの詩がコーランの教えに悖るといふ訴えを受けたイスラム教宗裁判官の判決を歌っている。内容は詩人の権利を認めたものであり、それ自体ゲーテの主張となっているのだが、ブルダッハの研究によって、実はこの詩は、ハーフィス訳につけられたハンマーの序文からのほとんどそのままの書き写しであることが明らかになっている。そのような詩を言葉の楽しみの例として挙げたのは、最後の二行、

衰れなエブズトこれを記せり  
神、彼の罪全てを許したまわんことを。

Dieses schrieb der arme Ebsuud,  
Gott verzeih ihm seine Sünde alle. 4)

ゆえである。極言すればこの二行には何ら意味はない。現在ならば職名と署名とを記す場合に用いられた常套句であって、arm という形容詞は自らが敬虔なイスラム教徒であることを示すために、(そして恐らくは口調の都合も多分に含んで) 付加されたものであり、神に許しを求める一行は、キリスト教徒ならばアーメンと記すところであろう。しかし、単なる署名と比べ、何と豊かで美しい習慣であろうか。この署名形式を採用したことが、ここでの東方性を成しているが、それは珍しい習慣の単なる踏襲にとどまらず、気に入った言葉を使ってみたいという詩人の衝動をも意味している。一編の詩の締め括りとして問題の二行が発揮している効果は、ゲーテがかなりの満足感を抱いてこの言葉を使ったことを示している。それゆえ、この二行に限定した場合、形式が内容なのである。更に、「詩人の書 (Buch des Sängers)」に収められた次の詩の場合、西東詩集での形式と内容の関連が一層明らかとなる。

東方は神のもの!  
西方は神のもの!  
北方・南方の国土は  
その手の平安のうちに憩う。

Gottes ist der Orient!  
Gottes ist der Okzident!  
Nord-und südliches Gelände  
Ruht im Frieden seiner Hände. 5)

コーランに最初の二行そのままの章句が存在する。この詩の内容は何であろうか。極めて簡潔なこの四行は、確かにゲーテ的汎神論の絶好の容器となっている。好意的にみれば、彼が自らの思想をコーランの章句に託し、それに多少

自分の手を加えたものとは言えよう。しかし、この詩から直接的に汎神論を読みとることで何らかの詩的感興が生ずるだろうか。むしろ、あまりにあからさまな説教口調によって逆に反感を引きおこすのではなかろうか。また、詩人は、適当な容器さえあれば、やどかりのようにぬくぬくとその内に収まってよいものであろうか。しかし、ゲーテはつまらぬ説教詩を書いたわけではなく、また怠惰無能な詩人でもない。この詩にTalismane という標題を与え、他の同様な詩と併置することで、ゲーテは確かな意味を付与している。イスラム教徒がコーランその他の章句を書き抜いて身につけている護符 (Talisman) という体裁でのみ、あからさまな神への讃美の言葉が、欠点となるよりも、むしろ物珍らしい新鮮さをもたらす。またしても、言葉は形式を形成し、形式が内容なのである。これはまたゲーテ自らが「注釈と論文」中で「言葉の最も純粋な意味で…パロディスティッシュ… (im reinsten Wortverstand…parodistisch…)<sup>6)</sup>」と呼んでいる在り方でもある。

形式という媒介を経ず、言葉の遊びそのものが目的となっている詩もまた存在する。そこに於いて、内容は軽ければ軽い程、良い。当時流行していた coiffure à la Chinoise という女性の髪型を揶揄した「彼女達は兜をかぶって大戦 (Unter Helme fechten sie)<sup>7)</sup>」という句に、深い内容を見出そうとすることは、詩の軽妙な味わいをそこねる結果となるだろう。またParalipomena に収録されているHudhud auf dem Palmensteckchen は、ステッキのにぎりの彫刻を歌っただけのものである。

やしのステッキに彫まれたフドウフドウ

すみっこの方で

眼をキョロキョロと、巢をくって、可愛いこと!

またいつでも抜け目のないこと。

Hudhud auf dem Palmensteckchen

Hier im Eckchen,

Nistet äuglend, wie scharmant!

Und ist immer vigilant. 8)

蛇足ながらHudhud は別名をWiedehopf, ペルシャではありふれた鳥で、従ってハーフィスの作品によく見られる。ゲーテは西東詩集集中他の個所でもこの鳥を登場させており、この鳥そのもの、フドゥフドゥという名前にかんがりの愛着を抱いていると思われるふしがある。

コメレルはこの詩を絶讃して、次のように言っている。

「確かに、たわむれは無内容である。しかし、精神がたわむれるとき、それは稀有な絶妙な光景となる。——この近代性のいかに美しいことか、それが初めて成立するときには、かくも放埒の悪徳に汚されていないものか」 9)

しかし、この種の言葉の遊びの極地は、やはり「ズライカ書(Buch Suleika)」に収められた「巻き髪よ、我をとらえよ (Locken, haltet mich gefangen)」<sup>10)</sup>に始まる詩の有名な Hatem=Goethe の同一性であろう。「ズライカ書」においてゲーテは恋人をズライカと呼び、自らはハーテムと名のっている。それにもかかわらず、この詩に於いては、Morgenröte と当然脚韻の合うべき個所に意図的に Hatem という語を置くことにより、もはやハーテムではないGoethe という名を読者の脳裏に響かしめているというものである。かつては言葉の裏に象徴が隠されていたが、ここでは内容とともに言葉そのものが隠されている。

以上、言葉の問題として論を進めてきたが、これは実際には、ゲーテの精神の在り方の問題でもあった。何故なら、詩に於いては、言葉が詩人であり、詩人は言葉そのものであるからだ。また、ここで今一度西東詩集での東方性に目を向けると、冒頭で述べた如く、それは単に作品の舞台であるよりは、むしろ詩人の精神の在り方を内容としていることが明らかになる。グンドルフが、

「西東詩集の様式は、だからそれほどゲーテの東方的教養体験によって規定されてはならず、むしろそれは、彼の年齢の精神状況に由来するのであって、その際の東方的という心組みは、付随現象にすぎない」<sup>11)</sup>

と説き、またゲーテ自身も、

「東方の詩歌の最高の特性は、我々ドイツ人が『精神』と呼ぶもの、即ち、上にあつて導きながら支配するもの、である。——精神は主に老人または老齡

期に入る時代に属する』<sup>12)</sup>

「若年期には行動と活動がふさわしいとすれば、老年期には、観照と表白が適っている』<sup>13)</sup>

と述べているのは、この事情を指す。即ち、老人ゲーテの精神は老齡期にある東方の文学に親しみを見出し、東方といういわば仮装の下でたわむれ、たのしむという形でその大きさと多様性を存分に発揚させようとした。西東詩集の詩においては、例えば現代の詩人のように、その創作動機が明らかに或る問題意識に基づいており、その問題を解決するため、または、解決は出来ないまでもその問題と対決するために詩作をする、という立場はとられていない。老人の精神は問題そのものとたわむれようとし、問題との対立が避けえぬ場合には、少くとも対立しているという姿勢を隠そうとしている。開きなおった武骨なきまじめさは、東方性につかわしくないからである。しかし、そこに或る不自然さ、強制が生ずることは否めないであろう。そして精神が、その結果を、どのようにして我が身にひきうけていったかを読むことが、西東詩集の魅力の一つともなっている。

ゲーテが、自らを享受するためにまず第一に成し遂げようとしたことは、「若がり (Verjüngung)」である。Verjüngung のモチーフは全編にちりばめられているが、最も明瞭なものは、先に触れた「ヘジラ」のそれである。

北方・西方・南方 ともに崩れさり

王座は破け 帝国は打震える。

逃れいでよ 純粹なる東方へ

族長の大気を味わわんがため。

愛に、酒に、歌に、

キゼールの泉 汝れを若やげん。

Nord und West und Süd zersplittern,

Throne bersten, Reiche zittern,

Flüchte du, im reinen Osten

Patriarchenluft zu kosten,  
Unter Lieben, Trinken, Singen  
Soll dich Chisers Quell verjüngen. 14)

キゼールは伝説上の若がえりの泉の番人であり、ゲーテはその泉の恩恵に浴したいと希っているのだ。ファウスト第一部にも、魔女の作った薬の力でファウストが若がえる場面があり、両者は一見全く同性質のもののように見える。しかし、この二作の間に横たわっている時間の距りは、本来同じモチーフに別の意味を与えてしまっている。

ファウスト第一部において、若がえりは、伝説の踏襲と、筋の発展を可能ならしめる手続き以上の意味は持たない。また、全ての知識に倦み果てた老人ファウストは、実際上は、予感に満ち満ちた青年ゲーテである。そして作品は、情熱と憧憬、自己と外界の分裂等、青年の自己中心的主観主義の徴候を余すところなく示しており、結局、この若がえりは、一旦老人に仮装したゲーテが本来の自己にもどつたにすぎない。

これと全く逆の場合が西東詩集である。今や老人であるゲーテは、若さを求める。詩集の初期において、それは、息づまるような現実からの離脱を意味していたにすぎなかったが、マリアンネという女性の登場によって、この願望はより切実なものとなり、錯綜した表現を伴ってくる。

既に述べたように、西東詩集での東方性は、異国的題材が扱われる舞台ではあるが、より本質的には、老人ゲーテの精神の在り方であるという二重性を帯びていた。そして今や、若さを求めるという形で、この詩集全体の存在を可能ならしめている基本要因からさえも逃れたいという矛盾した気持がゲーテの内に動きはじめている。しかし、これは不可能なことである。確かに彼は情熱を抱くことは出来よう。しかし、彼が恋人にふさわしくあるために必要な、若さがただそれだけで備えている優越性が自分には欠けていることを、彼は痛切に感じている。彼の唯一の拠り所は、自らの精神性である。だが、この精神性という形の老年には、自らが常に自己自身であり続けねばならないという宿命が与えられており、老人である自分から精神性を取り去ったならば、後に何が残

るかとの危惧がゲーテにはあるのだ。かつては、青年が老齡を装おったが、ここでは、老人が青春を装っている。それゆえ、表面での華やかなたわむれ、若やいだ気分にもかかわらず、「常に隠された密やかな悲哀」が全編の底を流れている。そして、この暗い下地の存在によって、表面の華やかさが一入ひき立ち、見事な効果をあげるのだ。

愛には愛をかさね、時には時をかさね、  
言葉には言葉をかさね、まなごしにはまなごしをかさね、  
くちづけには、まことをこめたくちづけをかさね  
ためいきにはためいきをかさね、喜びには喜びをかさねた。  
このように夕べを過し、このように朝を過した。  
だが、お前は感じるだろう。私の歌の  
常に隠された密やかな悲哀を。  
ヨゼフの魅惑を私は借りたい、  
美しいお前にこたえるために。

Lieb um Liebe, Stund um Stunde,  
Wort um Wort und Blick um Blick;  
Kuß um Kuß, vom treuesten Munde,  
Hauch um Hauch und Glück um Glück.  
So am Abend, so am Morgen!  
Doch du fühlst an meinen Liedern  
Immer noch geheime Sorgen;  
Jussuphs Reize möcht ich borgen,  
Deine Schönheit zu erwidern.

15)

単純な技巧である畳話法で愛の昂まりを歌いあげたあと突然隠された悲哀に触れ、すぐさまたわむれの言葉が付加されている。この老人らしい慎み深さが悲哀をより魅力のあるものとしていると言えよう。

この直後にズライカの有名なVolk und Knecht und Überwinder で始まる詩が続き、上述の詩に対する慰めの返答が与えられている。ズライカは、慰めの論拠として、「全ての時代の人々が認めている」ことを接続法で述べる。「地上の子の最高の幸福は人格であり、自己を失いさえしなければ、どんな生活でも過ごせる、と」「人格 (Persönlichkeit)」という言葉は、精神 (Geist) と同質のものを指すと理解してよいであろう。Zeit と脚韻をふむ必要があるからである。この詩は、

自分自身でさえあり続ければ  
何を失なってもよい。

Alles könne man verlieren,  
Wenn man bliebe, was man ist. 16)

で終わっている。この二行には、確かに、それなりの意味が与えられている。しかし、接続法の使用によってかすかに暗示されているように、悪く言えば無味乾燥で自己満足的な説教よりも、むしろ、全てを失っても自己が自己であり続けるほかはない老人の高められた意識の痛みを内容としているのだ。そうであってこそ、これに対するハーテムの返答、「ズライカがいなければ、私は無になってしまう」という内容の言葉が、諧謔として意味を持ちえてくる。冒頭で述べたハーフィスの手法、即ち、言葉の表面上の意味とその背後に隠された象徴性とは、いわば意味の範疇における二重性であった。しかし、ここでは意味の背後に感情が隠されているのだ。

西東詩集は、以上述べられてきた二重性に加えてまた別種の様々な矛盾と自家撞着の上に成り立ち、常に分裂と疎外の可能性を内包している。そしてまた、二重性は自らの矛盾の微妙な均衡によってのみ意味を保ちえ、いずれか一方に固着した場合は、二重性のみならず、相矛盾する要素の双方が意味を失うときなのだ。このように流動的な状況のなかで、真に重大な危機に直面した時、ゲーテがいかに驚嘆すべき精神の働きを示してその危機を乗り切ったか、その例

を、我々はWiederfinden（再会）と題された詩に見ることができる。

再 会

ありうることか！星のなかの星  
いま一度、おまえを胸にだけようとは。  
ああ、離れ過す夜の  
奈落よ、痛みよ！  
そうだ、おまえこそ 私の喜びの  
うるわしく いとしき 片方。  
過ぎ去った苦痛を思うと  
私は現在に戦く。

世界が神の永遠の胸の  
奥底に在ったとき、  
至高の創造欲によって  
神は初まりの時を整えた  
そして あの言葉を言ったのだ、「成れよ」  
その時だ、痛ましい「ああ」の声が鳴り響いたのは、  
万有が荒々しい身振りで  
諸々の現実に分れ散ったときに。

光が現出した！ おずおずと  
闇は身をひきはなし  
その刹那 四大は  
分裂し 飛散した。  
素早く 荒れすさんだ夢想のうちに  
どれもが広がりを競った。  
居竦んだ。測りしれぬ空間のうちに  
あくがれもなく ひびきもなく。

あらゆるものの沈黙と停止，そして荒廃，  
はじめて 神は 孤独だった！  
その時 神は暁を創り成し  
苦悶のなぐさめとした。  
暁は 混濁のうちより  
鳴り響く光彩のあやを上げ，  
今こそ，かつて別たれたものたちが，  
再び愛しあえるようになった。

そして求めあったのだ。心せくまま，  
互が互に属しあっているものは。  
そして測り知れぬ生命へと  
感情とまなざしが向けられた。  
掴みかかろうと，引きさらおうと，  
ただ結ばれてさえあれば！  
アラーはもはや創造せずともよい，  
私たちがアラーの世界を創る。

だから，暁に紅たる翼をもって  
私は おまえの口もとに引きよせられ  
また夜は千の封印をもって  
輝く星のごとく 契りをかためる。  
ともに私たちは この地上で  
喜びにあれ 悩みにあれ 典型なのだ，  
そして再びあの言葉が，「成れよ！」と響いたとて，  
再び私たちに 別ちはしない。

Wiederfinden

Ist es möglich! Stern der Sterne,

Drück' ich wieder dich ans Herz!  
Ach, was ist die Nacht der Ferne  
Für ein Abgrund, für ein Schmerz!  
Ja, du bist es! meiner Freuden  
Süßer, lieber Widerpart;  
Eingedenk vergangner Leiden,  
Schaudr' ich vor der Gegenwart.

Als die Welt im tiefsten Grunde  
Lag an Gottes ew'ger Brust,  
Ordnet' er die erste Stunde  
Mit erhabner Schöpfungslust,  
Und er sprach das Wort: ‚Es werde!‘  
Da erklang ein schmerzlich Ach!  
Als das All mit Machtgebärde  
In die Wirklichkeiten brach.

Auf tat sich das Licht! So trennte  
Scheu sich Finsternis von ihm,  
Und sogleich die Elemente  
Scheidend auseinander fliehn.  
Rasch, in wilden, wüsten Träumen  
Jedes nach der Weite rang,  
Starr, in ungemessnen Räumen,  
Ohne Sehnsucht, ohne Klang.

Stumm war alles, still und öde,  
Einsam Gott zum erstenmal!  
Da erschuf er Morgenröte,

Die erbarmte sich der Qual;  
Sie entwickelte dem Trüben  
Ein erklingend Farbenspiel,  
Und nun konnte wieder lieben  
Was erst auseinander fiel.

Und mit eiligem Bestreben  
Sucht sich, was sich angehört,  
Und zu ungemessenem Leben  
Ist Gefühl und Blick gekehrt.  
Sei's Ergreifen, sei es Raffen,  
Wenn es nur sich faßt und hält!  
Allah braucht nicht mehr zu schaffen,  
Wir erschaffen seine Welt.

So, mit morgenroten Flügeln,  
Riß es mich an deinen Mund,  
Und die Nacht mit tausend Siegeln  
Kräftigt sternenhell den Bund.  
Beide sind wir auf der Erde  
Musterhaft in Frennd' und Qual,  
Und ein zweites Wort: Es werde!  
Trennt uns nicht zum zweitenmal 17)

ここでは、まず再会の歓喜とともに、主体が自らの状態を意識したときに起る自己疎外の危機感が、提示される。

過ぎ去った苦痛を思うと

私は現在に戦く。

今まで耐えてきた苦悩があまりに大きかったゆえに、その原因（即ち恋人の

不在)が取り除かれても、すぐにはそれに適応できず、習性となった苦悩の残滓と、再びその苦痛を味わわなければならないかも知れぬ未来への恐れが、現在という時点に収斂し、それに圧倒されて自己の感性から分離しかかっている現在の状態を真に自己のものとするために、主体はここで驚嘆すべき働きを示す。意識がまず彼個人の運命から全宇宙にまで拡大され、創造の初めにまでさかのぼる。そこにおいて、不完全な現実そのものが含む不毛と沈滞の要素こそ全世界に基本的に存在する苦痛であるという認識が、壮大な規模と巧みな擬人化による切実さを伴って、あらためて感受される。

Einsam Gott zum erstenmal!

そして、極めて簡潔かつ大胆に言い放たれた「初めての」「神の」「孤独」に、世界苦の全てが思いがけない新鮮さで凝縮されてから、すぐさまその克服が提示されるが、それは「苦悶をあわれだと思ふ暁」として表象される。「暁」の象徴するものを別の言葉で「愛」と呼ぶにせよ、詩の展開においては、それは克服の過程なのだが、主体の意識では神から与えられた純粋な恩寵として感じとられている。

世界に活動と発展とが可能となり、全ての被造物は、自己が本来属しているものとの合致によって、これからは自らの力で生成を続けてゆくことができる。「だから (So)」と、詩人は自分達のことについて語る。彼の個人的な危機は、全宇宙の規模に拡大され、その規模において克服融和が達成されてから再び彼自身に意識が限定されたときには、同時に彼の危機も解消されている。驚くべきことだが、この過程によって彼は自身の運命と世界のそれとを合致させ、個人であると同時に「典型 (Muster)」でもあるという類まれな状態を成し遂げているのだ。

ともに私たちは この地上で

喜びにあれ 悩みにあれ 典型なのだ。

この言葉は、何の根拠もない単なる希望や己惚で言われたのではない。この言葉にふさわしい精神によって、完全に正当な手続きを経たうえで、獲得されたものである。

以上これまで二重性という言葉で述べられてきたが、これは、より正確には、

西東詩集を形成する多層性の一部と呼ぶべきものであろう。しかし、詩集全体をもう一度ふりかえて見た場合、これらの多層性も、ある老熟した精神性の限定された内部での問題であり、成長発展の要因に乏しいと言わざるを得ない。そして、この点にこそ、後年ゲーテがエッカーマンに語った言葉、「西東詩集は、もはや私に何の影響も及ぼさない。……それはまるで、脱ぎすてられた蛇の抜けがらのように路傍に横たわっている」<sup>18)</sup> という意味の言葉を解く鍵があるに違いないのである。

注

1. Hamburger Ausgabe. 1968. Bd. 2. (以下H. A. と略す) S. 7
2. H. A. Bd. 2 S. 25
3. ebd.
4. H. A. Bd. 2. S. 22
5. H. A. Bd. 2. S. 10
6. H. A. Bd. 2. S. 255
7. H. A. Bd. 2. S. 29. in: „Gewarnt“
8. Berliner Ausgabe, Bd. 3, S. 344
9. Max Kommerell; Goethes große Gedichtkreise, in: Gedanken über Gedichte, Vittorio Klostermann Frankfurt am Main, S. 275 f.
10. H. A. Bd. 2, S. 74f.
11. Gundolf: Goethe, Georg Bondi in Berlin 1925, S. 666
12. H. A. Bd. 2. S. 165
13. H. A. Bd. 2. S. 126
14. H. A. Bd. 2. S. 7
15. H. A. Bd. 2, S. 71
16. ebd.
17. H. A. Bd. 2, S. 83f.
18. Eckermann über ein Gespräch vom 12. Januar 1827.